ブラジルの国民的な飲み物
〈ガラナ〉

ブラジルの清涼飲料水といえばガラナの右に出るものはない。色は薄茶で、甘い味だ。ガラナ・アンタルチカはビンの形状がコカ・コーラに似ているが、コカ・コーラをはるかにしのぐ人気をほこっている。年間販売量は8億リットルといわれ、ガラナ市場のシェアは約30パーセントである。ガラナはブラジルの国民的な飲み物といっても過言ではない

アマゾン先住民の飲料

ガラナはもともと植物名称であり、トゥピ語系のことばに由来する。故郷と目されるのはアマゾン川中流域であり、先住のサテレ・マウエ人が愛飲してきたことで知られている。その中心地であるマウエス市にはガラナ・アンタルチカの工場もある。

ガラナの実からいわゆるガラナ・パンやガラナ・スティックがつくられる。種子を乾燥させて臼でつき、半年くらい乾燥させてパン状にしたものがガラナ・パン。丸い棒状に固めたのがガラナ・スティック。その棒をピラルクという巨大な淡水魚の舌でこすった粉末がガラナ・パウダーである。サテレ・マウエ人のあいだでは、家庭でも日常的につくられ、集会のときなどには、粉末を水で溶き大きなヒョウタンの器に入れて回し飲みをする。わたしも一度、そうした集会で飲んだ経験がある。味は淡白だが、多少苦みと渋みがある。アルカロイドとしての鎮静作用があり、集会では興奮を抑制する効能がえがたいのであろう。

ちなみに、一七世紀にサテレ・マウエ人に宣教をこころみたイエズス会士は「寒さに対処するには砂糖が必要だが、暑さに対抗するにはガラナが一番だ」としるしている。炎天下の旅には必需品でもあったようだ。また空腹を感じさせない作用があり、頭痛、発熱や下痢などの症状にも効くという。

サテレ・マウエ人のあいだでは、ガラナの起源神話が次のように伝えられている。むかしむかし、二人の兄と末の妹が暮らしていて、妹はパラ栗を育てる農園を管理し、薬草から薬を調合する役目を負っていたが、ある日、蛇が彼女を妻にしたいと思い、股間に侵入してしまった。すると彼女は妊娠して男の子を生んだ。その男の子のために彼女はパラ栗を植えた。その栗は大人になってからでないと食べてはいけなかったのに、男の子はタブーを破ってパラ栗を食べてしまう。それが見つかり、見張り番の動物たちに殺されて、墓に埋められる。その死体の左の目からは偽りのガラナ、つまり実のならないものができ、右目からは本物のガラナが生えた。その後この墓からは、サルやイヌ、ブタ、そして最後に人間の先祖が生まれた、というような筋である。

サテレ・マウエ人はガラナの効用を独占的に享受するだけでなく、他の民族との交易にも使用していた。その範囲も遠くマトグロッソ州やボリビアにまでおよんでいた。

中牧 弘允（なかまき ひろちか）
民博 民族文化研究部
専攻は宗教人類学、経営人類学。ブラジル・アマゾンの日系人社会や先住民社会の研究をおこない、サイケデリックス（精神拡張剤）の調査にも従事したことがある。

ブラジル製粉末ガラナ製品のサンプル

ガラナ・スティックと淡水魚ピラルクの舌。ざらざらした舌でこすって粉末にする

ガラナの実。熟すと殻が赤くなる

日本にもあるガラナ・ドリンク

日本では滋養強壮剤の原料としてガラナエキスが使われることもあれば、炭酸飲料水のガラナも各種製造されている。

ガラナ・ドリンクはなぜか北海道でかなり販売されている。小原のコアップガラナをはじめガラナエール、北海道ガラナ、キリンガラナ、ガラナスカッシュ等々。熊出没注意コアップガラナという製品まである。

一説によると、コカ・コーラの日本解禁に対抗してガラナの製造を全国的にはじめたところ、他地方とくらべ北海道へのコカ・コーラの進出が遅れたため、ガラナの味が北海道に定着したのだそうだ。北海道ではビールにガラナを入れた時期もあったらしい。

在日ブラジル人が多数暮らす地域ではソフトドリンクのガラナは必需品であり、缶のガラナ・アンタルチカが主力商品となっている。驚いたことには、炭酸飲料だけでなく、酎ハイのガラナも全国的にでまわっている。ガラナは日本でも意外と健闘しているのだ。

日本で販売されているガラナ・ドリンクのサンプル

戦前のガラナ

かつてマウエス市には、日本人が入植した時代がある。一九二八年には大石小作という人がガラナ栽培の夢を抱き、アマゾン興業株式会社を設立、自身も一九二九年、六名の移住者とともに入植した。このグループはかなり奥地まで入ってガラナを植えつけたが、ずさんな経営でガラナ事業は挫折する。その後、東京で食品学校をひらいていた崎山比佐衛という人物が、その分校をアマゾンにつくるといって、親戚を引き連れて入植した。そして、四万五〇〇〇本のガラナ園の経営に力を尽くしたが、彼もマラリアにやられて失敗する。崎山一族の末裔は今でもマウエス市に住んでいるが、ガラナの栽培からは手を引いている。

国内でガラナが登場したのは一九二七年である。上野松坂屋でガラナの宣伝飲料会が開かれている。戦前、森下仁丹や大正製薬はガラナ飲料を販売していたし、山梨醸造はガラナ酒を製造していた。戦前のガラナ製品はアマゾン入植者たちの夢とどこかでつながっていたのだろう。

ガラナ
Paulinia cupana
アマゾン原産のムクロジ科のつる性植物で赤い実をつける。コーヒー豆とおなじくらいの大きさであるが、コーヒーの3倍から5倍くらいのカフェインが含まれている。タンニンの含有量も非常に多く、下痢や消化器系の症状によく効くという。またサポニンは疲労症候群に効能があり、カテキンは偏頭痛や神経症に効果があるとされる。最近は体重の減量や認知症にも効くという宣伝がめだつ。

ガラナ・アンタルチカ
手前の料理はフェイジョアーダ